神宮文庫蔵『毛詩名物図説の和名問答』に関する一考察
―附録・同翻字―

原田　信

はじめに

儒学の経典の一つ『詩経』には殷周から春秋時代中頃までの民謡や祭祀歌が収録されており、そこには様々な動植物の名称が詠み込まれている。これら古代の動植物の名称が実際には何という動植物に該当するのか、そして、その生態や特徴はどのようなものなのか。こうした情報は『詩経』各詩の内容や詩が作られた時代背景を理解する上で重要な手がかりとされ、古来より経学者が考証し、注釈を施してきた。また、三国時代または唐代の人とされる陸璣の『毛詩草木鳥獣虫魚疏』以降、歴代の『詩経』注釈書の中には、動植物を博物学的な観点から考証する専門書も著されるようになった[1]。このような書物の一つに、清の徐鼎が著した『毛詩名物図説』がある。

『毛詩名物図説』の最大の特徴は、中国で編纂された『詩経』動植物の考証書としては極めて少ない図解本だという点にある。このためか、同書は博物学的関心から本草や物産が広く研究された江戸中期の日本に伝わると、訓点や句点、和名を附した上で翻刻された。この『毛詩名物図説』や和刻本に対する疑問と回答を記したのが『毛詩名物図説の和名問答』（以下、適宜『和名問答』と略する）である。

『和名問答』には、清から舶来した『毛詩品物図説』に対する江戸時代の関心のあり方、さらには和刻本の刊刻経緯のように当事者しか知り得ない情報が記されており、当時の本草や物産といった学問、ひいては出版文化の実態を知る上で重要な資料だといえよう。そこで、本稿では『毛詩名物図説』の編纂と翻刻および『和名問答』の成立経緯と内容上の特徴を整理するとともに、『和名問答』全文の翻字を末尾に附した。

一．徐鼎の『毛詩名物図説』

『毛詩名物図説』は全九巻、巻首には編者である徐鼎の自序と凡例がある。本編は鳥（巻一）、獣（巻二）、虫（巻三）、魚（巻四）、草（巻五、六、七）、木（巻八、九）の各部に分かれており、毎葉上部には動植物の図を示し、下部にはその動植物に関する毛伝や鄭箋、朱子注といった『詩経』の注釈や小学書、本草書などの記述、そしてこれらの記述を踏まえた徐鼎の按文がある[2]。

編者の徐鼎は字を峙東、号を雪樵といい、呉県（現在の江蘇省蘇州市）の優貢生であっ

た。後に江蘇巡撫の薩載に家庭教師として招かれ、その子息を教育した。徐鼎は特に画を得意としており、初め清の謝淞洲の画を学び、後に明の沈周を宗としたという[3]。

『毛詩名物図説』の編纂と刊行の経緯は、同書の自序に記されている。これによると、徐鼎は年少の時分、兄に『毛詩』を教えられて名物学の重要性に気づき、書店に通うこと二十年、諸書の記載を集めた。しかし、書物の上の学問だけでは「格致多識の学」として不足を感じ、山川をめぐって民間の情報を集め動植物の図を描いた。後に、巡撫の幕下で講義を行った際、同僚に『毛詩名物図説』の原稿を示したところ、刊刻することを勧められたという[4]。

『毛詩名物図説』の巻首には乾隆辛卯（1776）の自序があることから、この後まもなく刊刻されたと考えられる。また、書中には書店等の刊記がない。おそらくは徐氏の私刻であろう。

中国では唐代以前、『詩経』の動植物を図示した書物がいくらか存在したようだが、いずれも現存していない。筆者が管見した限り、宋代以降に著された『詩経』動植物の考証書のなかで『毛詩名物図説』はほぼ唯一の図解本である。このためか、張之洞（1837～1909）が四川の教育を管轄した際に初学者の学ぶべき書物を示した『書目答問』には学習参考書の一つとして『毛詩名物図説』が挙げられており、その内容は清末でも相応に評価されていたことが窺われる[5]。一方、民国時代の蔵書家・趙味滄が抄写した『毛詩名物図説』の跋文（1922）には「毛詩名物図説九巻、僅於書目答問中見之。覓刊本十余年未得」とあり、民国以降、『毛詩名物図説』の刻本は誰もが容易に入手できるほど多くは流伝しなかったらしい[6]。徐鼎の家はその子の代で没落し、その著書も散逸したとされており、『毛詩名物図説』の版木も同時に失われたと推測される[7]。現存する『毛詩名物図説』はおそらく徐鼎の在世中に刊刻され、その後刊刻されることがなかったため、後世、それほど多くは流伝しなかったのだろう。

二.『毛詩名物図説』の和刻本

『毛詩名物図説』は文化五年（1808）に江戸で翻刻された。初印本は江戸の書店である須原屋善五郎と堀野屋儀助が連名で版元となり刊行されたが、同じく江戸の丹後屋伊兵衛が版元となった後印本もあり、江戸期を通じて複数回刊行されたようである。

『毛詩名物図説』和刻本には、訓点と句点、そして和名が附されている。封面には「北條蠖堂校・小野蘭山和名附」とあり、北條蠖堂が校正を行い、小野蘭山が和名を附したことがわかる。また、奥付には「養眞堂」という蔵版者の名称が記されている[8]。

北條蠖堂は江戸の人、名は士伸、通称は永二郎。江戸の石町（現在の東京都中央区日本橋）で儒学を教えており、文化年間に没したという[9]。また、小野蘭山（1729～1810）

は京都の人、名は職博、通称は喜内、蘭山は号である。松岡恕庵に本草学を学び、京都で「衆芳軒」を開いて本草学を教えた。寛政十一年（1799）幕命により江戸に赴いて医学館教授方となり、そのまま江戸で没した。全国に千人余りの門人を抱え、その後の本草学、博物学を発展させる多くの人材を育てた[10]。本草を中心に多くの著書を残したが、なかには『詩経産物解』や『詩経名物辨解正誤』といった『詩経』の動植物に関する著作もある[11]。

和刻本の巻首には幕府の医学館総裁や奥医師を歴任した多紀（丹波）元簡（1755 ～ 1810）の序がある。序中に「滕揚州翻刻之、以請序於予」と記されていることから、和刻本は「滕揚州」なる人物が翻刻を企図し、多紀元簡に序文を求めたことがわかる。

三.『毛詩名物図説の和名問答』の成立と内容

『毛詩名物図説の和名問答』は伊勢神宮の神宮文庫に所蔵されている。書中に書名は記されていない。首葉一行目「今般發兌ノ毛詩名物圖說ノ和名　先生ノ校正ニ候哉」という質問から始まるので、神宮文庫が目録に記載する際、仮の書名として「毛詩名物図説の和名問答」としたようである。全一冊、半葉十行、単魚尾、書口に「疑思問堂」と墨刷された紙に墨書で『毛詩名物図説』の和刻本に関する質問が記されており、その傍らに朱書で回答が記されている。質問者は春木煥光である。

春木煥光（1777 ～ 1843）は伊勢国山田の人、字は子培、堯章など、通称は隼人、三友堂、柳亭、象軒などと号した。春木家は山田の自治を担った「山田三方」二十四家の一つであるとともに外宮の権禰宜を務め、江戸時代は将軍家の御師として朱印地八百石を拝領する家柄であった。春木煥光は早くから本草学を好んで小野蘭山の門に学び、庭園で薬草を栽培したという[12]。春木煥光は神事に関する著作を多く残しているが、なかには『七十二候鳥獣虫魚草木略解』や『詩経名物訓解』といった動植物考証に関する著作も伝存している[13]。

一方、回答者については『和名問答』の末尾に「右謹乞教示　春木煥光拝　蘭山小野先生玉案下」とあり、神宮文庫の目録も小野蘭山としている。しかし、質問第一条の回答に小野蘭山の弟子である井岡元泉のことを「先生門人井岡氏」と記している。小野蘭山自身が回答を記したならば、自らを「先生」とは称さないだろう。小野蘭山が亡くなった翌年の文化十一年（1811）一年間の出来事を記した『春木煥光日記』には、春木煥光が度々人を介して江戸医学館の小野氏、すなわち小野蘭山の門弟であり、養子となって小野家を継いだ小野職孝（1774 頃～ 1852）と書簡を応酬していたことが見える[14]。『和名問答』に回答を記したのは小野職孝であろう。

『和名問答』が成立した時期は、『和名問答』冒頭の質問に「今般發兌ノ毛詩名物圖說」とあり、文化五年（1808）『毛詩名物図説』が刊刻されてから間もない頃であることは疑

いない。この後、小野蘭山は文化七年（1810）に没するが、先述したように『和名問答』はその末尾に「右謹乞教示　春木煥光拝　蘭山小野先生玉案下」とあり、小野蘭山宛の書簡の体裁をとっている。このことから、『和名問答』は文化五年から小野蘭山が没する文化七年前後までには成立したと考えられる。

『和名問答』に記された春木煥光の質問は全一〇五条ある。質問内容は概ね四種類、すなわち①『毛詩名物図説』の内容や信頼性に関する疑義、②和刻本の校正・刊刻経緯、③和刻本に記されている動植物の和名の適否や和産の有無、④春木煥光自身の解釈の適否に分類できる。以下では、和刻本の校正・刊刻経緯と、『毛詩名物図説』に対する小野蘭山や小野職孝の見解に言及しておきたい。

和刻本の校正・刊刻経緯に関する問答は第一条と第四条、第五条に見える。特に第一条では、小野蘭山が和刻本を校正したのかという質問に対して、次の回答が記されている。

> 此書、先生門人井岡氏和名ヲ附クル時、不佞一校シ遣候。其書林上木ノ力ナクシテ數年棄置シヲ、北條買求藏板トセシト聞ク。其上卽和名モ改メ候様子ニ見エ甚誤多シ。

この回答に見える井岡氏は小野蘭山の第一の門弟として知られた井岡元泉（1778～1837）のこと、「不佞」とは回答を記したと推測される小野職孝であろう[15]。回答によると、井岡元泉と小野職孝はある書店の依頼をうけて『毛詩名物図説』に和名を附した。しかし、その書店は、おそらく資金の都合で版木を彫ることができなかった。結局、和名を附した『毛詩名物図説』の原稿は「北條」が買い求め、和名に手を加えた上で版木を彫らせたという。この「北條」は、和刻本に校正者として名前のある北條蠖堂であろう。そして、版木の所蔵者も「北條」であったというから、和刻本に蔵版者として記されている「養眞堂」、そして多紀元簡の序に見える和刻本の刊刻者である「滕揚州」は、いずれも北條蠖堂のことだと考えられる[16]。

この回答によれば、小野蘭山は和刻本の和名考証に関わっていない。北條蠖堂は井岡元泉などが考証した和名を改竄した上で、小野蘭山の名前を利用して和刻本を売り出したということになる。春木煥光が最初の質問で和刻本の校正者が小野蘭山なのか尋ねているのは、当初から和刻本の和名に疑義を抱いていたからであろう。また、第五条に見える、句読に関する質問に対しては、北條蠖堂を厳しく批判する回答が記されている。

> 句讀ノ違、此書中甚多シ。北條ノ校セシ冂ハ、何事ヲ校セシヤ。誤字モ多ケレ圧不正。

これらの問答によるだけでも、『毛詩名物図説』の和刻本の内容に、小野蘭山やその門

弟の学問が正確に反映されていないことは明らかである。研究上、『毛詩名物図説』の和刻本に依拠する際には、この点に留意しなければならない。

次に、『毛詩名物図説』に対する見解の差異は、主に第二条、第三条、第一〇五条に記されている。第二条と第三条の質問で春木煥光は小野蘭山が『毛詩名物図説』の引用文や徐鼎の按文によって和名を附けたのか、そして徐鼎の按文の考証は正しいのか、という点を尋ねている。これに対する回答は「只正説ヲ取」や「（徐鼎の按文である）愚按中、正不正アリ。不正者ハ皆不取」というように、あくまで正しいと判断された内容に依拠したことを述べ、同時に「圖モ亦甚杜撰多シ」と徐鼎の『毛詩名物図説』自体に誤謬、疎漏のあることを指摘している。また、第一〇五条の質問で春木煥光は「若水翁ノ小識」（小野蘭山が学んだ松岡恕庵の師である稲生若水の『詩経小識』）、「松岡恕庵（江村如圭）ノ名物辯解」（松岡恕庵と小野蘭山の兄弟弟子である江村如圭の『毛詩名物弁解』）、「近来刊行ノ名物図考」（岡元鳳の『毛詩品物図考』）に誤りが多いと思われるが、徐鼎の『毛詩名物図説』は正確かと尋ねている。これに対する回答には「皆有是非」とあり、特定の著書の説だけが正確だとは限らないことを伝えている。小野蘭山や小野職孝は、『毛詩名物図説』が最新の舶来書籍だからといって、盲信するべきではないことを看破していたのである。

おわりに

『毛詩名物図説の和名問答』には、『毛詩名物図説』和刻本の校正や刊刻経緯など、当事者しか知り得ない情報が記されている。また、本稿では一部しか言及しなかったが、問答のなかには小野蘭山や小野職孝、そして春木煥光が『毛詩名物図説』をどのように評価し、参照していたのか、その詳細を示す記述もある。江戸時代の本草学者が清人の名物考証の成果を受容した実態、さらには江戸時代における本草学と経学との関わりを明らかにする上で、『和名問答』は重要な資料だと言えよう。本稿ではひとまず以下に『和名問答』の翻字を掲載して広く研究の資に供し、『和名問答』が解明の手がかりとなる諸々の問題については、稿を改めて論じることにする。

〔注釈〕

1.『詩経』中の動植物の考証に関して比較的知られた著作には、宋代の蔡卞『毛詩名物解』、明代の馮応京『六家詩名物疏』や林兆珂『毛詩多識編』、呉雨『毛詩鳥獣草木考』、清代の毛晋『毛詩陸疏広要』や趙佑『草木疏校正』、丁晏『毛詩草木鳥獣虫魚疏校正』、焦循『陸氏草木鳥獣虫魚疏疏』、多隆阿『毛詩多識』がある。
2. 本稿では北京中国国家図書館および日本国会図書館所藏の乾隆三十六年刻本を参照した。
3. 徐鼎の経歴は『毛詩名物図説』自序のほか、清の馮金伯『墨香居画識』巻六や蔣宝齢

『墨林今話』巻三に伝が見える。前者は『中国歴代画史匯編』第四巻（天津古籍出版社、1997 年）、後者は周駿富輯『清代伝記叢刊』芸林類九（明文書局、1985 年）を参照した。

4.『毛詩名物図説』の自序には「余丁束髪時、兄授以毛詩三百篇、輒遇耳目聞見之物、欣然有所得。乃欲博考名物、搜羅典籍、往來書肆不憚煩、不揆檮昧、編而輯之、閱二十年矣。尤恐於格致多識之説、未精詳也。凡釣叟、邨農、樵夫、獵戶、下至輿臺皁隷有所聞、必加試驗而後圖寫」や「時余在中丞幕府、忝居講席、與同學究經義。出示斯編則卷首有歸愚沈師手書名物一書傳世之學數語、即首肯曰、先生何不壽諸梨棗以公同好。嗣又爲坊間請梓」とある。

5. 張之洞撰、范希曽補正、孫文泱増訂『増訂書目答問補正』（中華書局、2011 年）を参照した。

6. 同抄本は上海図書館蔵。趙味滄は、倫明『辛亥以来蔵書紀事詩』（北京燕山出版社、2008 年）に見える近代の蔵書家「趙慰蒼」のことか。同書には「貴陽趙慰蒼、曾管教育部圖書館、早歿」とある。

7.『墨林今話』巻三、徐鼎の伝の末尾には「嗣子某不克家、以窮困卒。撰著散佚、莫克問矣」とある。

8. 宮城県図書館と三重県立図書館所藏の文化五年翻刻本、および『詩経動植物図鑑叢書』上冊（中文出版社、1980 年）所収の影印本を用いた。

9. 以上の北條蠖堂の経歴は扇面亭編『江戸当時諸家人名録初編』（文化十二年刊の影印本、森銑三等編『近世人名録集成』第二巻、勉誠社、1976 年に収録）と『日本人名大事典』（平凡社、1979 年）による。

10. 小宮佐知子「東京都指定旧跡「小野蘭山墓」より出土した墓誌銘について」（東京都教育委員会『文化財の保護』第 39 号、2007 年、47 ～ 56 頁）所収の墓誌銘および小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』（八坂書房、2010 年）所収の磯野直秀編「小野蘭山年譜」を参照した。

11. 国立国会図書館には小野蘭山の後裔が寄贈した蔵書が所蔵されており、この中に『詩経産物解』と『詩経名物辨解正誤』がある。

12. 春木煥光の伝は『宇治山田市史』上下（宇治山田市役所、1929 年）と松島博『近世伊勢における本草学者の研究』（講談社、1974 年）を参照した。

13.『七十二候鳥獸虫魚草木略解』と『詩経名物訓解』はともに稿本である。前者は国立国会図書館、後者は神宮文庫に所蔵されている。

14.『春木煥光日記』は神宮文庫蔵。この日記の正月十六日、三月朔日、六月六日、六月廿一日、八月十一日の五箇所に医学館または医学館小野氏との書簡の往復に関する記述

が見える。小野職孝は字を士徳、号を蕙畝といい、小野蘭山の孫にあたる。二十六歳の時、蘭山とともに江戸へ赴いて身辺の世話とともにその事業を助けた。蘭山の没後は小野家を継ぎ、医学館講書や小石川養生所出役を歴任し、奥医師格御医師となった。小野職孝は多くの著書を残しており、『詩経』の動植物について『詩経草木解』を著している。以上の伝は、遠藤正治『本草学と洋学―小野蘭山学統の研究』（思文閣出版、2003年）の130～133頁を参照した。

15. 井岡元泉、諱は冽、号は桜川、父は津山藩医であった。父の跡を継いで同藩藩医となる。本草学を小野蘭山に学び、蘭山の没後、小野職孝の命により蘭山の墓誌銘を撰した。以上の伝は、小宮佐知子「井岡冽の人物像」（津山洋学資料館『―滴―洋学研究誌』第20号、2012年、29～38頁）を参照した。

16. 余談だが、国立国会図書館には「滕旭之」なる人物の詩文を集めた『養真堂遺稿』という書物が所蔵されている。和刻本の「滕揚州」すなわち北條蠖堂と同じく中国風の一字姓を「滕」と称しており、号も同じく「養真堂」である。この詩文集が北條蠖堂の著書だとすれば、詳細が不明な北條蠖堂の経歴を明らかにすることができるだろう。

附録　『毛詩名物図説の和名問答』翻字

【凡例】

① 問答各条の左部に番号を附した。

② 『毛詩名物図説の和名問答』の内容は墨書（春木煥光の質問）と朱書（小野蘭山の回答・訂正等）で構成されている。以下では墨書と朱書を区別できるよう、朱書の箇所は網掛けでした。

③ 『毛詩名物図説の和名問答』の漢字には正字体、異体字、略字、くずし字等が混在している。閲読の便を考慮し、字体は藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和大字典』（学習研究社、二〇〇五年）の親字を基準として、所謂旧字体に統一した。ただし、字体が問答の内容に関わる場合は底本のままとした。

④ 合略仮名は底本のままとした。

⑤ 紙幅の都合上、改行箇所は底本と異なる。

⑥ 閲読の便を考慮し、適宜句読点を施した。また、底本でも北條蠖堂による句点の位置に関する問答の中に句点の附された箇所がある。底本にもとから存在するこれらの句点は、筆者が施した句点と区別するため「◯」で示した。

⑦ 脱字があると思われる箇所には、丸括弧中に該当する文字を補った。

⑧ 底本の首葉には「神宮文庫」のほか、「春木文庫」「榊亭」の蔵書印があるが、翻字では省略した。

【本文】

1. 今般發兌ノ毛詩名物圖説ノ和名　先生ノ校正ニ候哉。

此書、先生門人井岡氏和名ヲ附クル時、不佞一校シ遣候。其書林上木ノ力ナクシテ數年棄置シヲ、北條買求藏板トセシト聞ク。其上卽和名モ改メ候樣子ニ見エ甚誤多シ。

2. 右和名ハ、圖ノ下ニ引タル説々ノ中ニテ能ク當リ候説ニヨリテ御附ケ被成哉。又、愚按云云ノ説ヲ御取被成候テ御附ケ被成候哉。

只正説ヲ取、愚按ノ説ノミヲ取ニ非ス。圖モ亦甚杜撰多シ。

3. 右圖下ノ説々ノ中、愚按云云以下ノ説、正シク候哉。

愚按中、正不正アリ。不正者ハ皆不取。

4. 右圖説汪唐本翻刻ト見エ候。本文ノ句讀モ唐本ノ句讀ニ候哉。又ハ唐本ニハ句讀無之候ヲ、北條蠖堂先生ノ句讀被付候哉。

唐刻ハ未見、卽句讀ノ有無不可知。書林ヨリハ寫本ノミヲ見セ止。

5. 右句讀、少々誤リ候處モ有之候樣覺申候。其一二。

左記。

黄鳥ノ下、格物總論、鷽黑尾嘴尖○紅腳青○遍身甘草黄色○　如此句讀アリ。嘴尖紅○腳青○トアリソウナルヿニ覺エ申候。御説如何。

可也。句讀ノ違、此書中甚多シ。北條ノ校セシヿハ、何事ヲ校セシヤ。誤字モ多ケレ汪不正。

6. 雉ノ下、郭璞註爾雅曰中略鷩雉似山雞而小○冠背毛黄○腹下赤項○綠色鮮明秩々○海雉如雉而黑○トアリ。鷩雉似山雞而小○冠背毛黄○腹下赤○項綠色鮮明○秩々海雉如雉而黑○トアリサウナルモノニ候。御説如何。

可也。

7. 右説本文ノ訓點、先生御附ケ被成候哉。蠖堂先生被附候哉。

已ニ首ニ書ス。仍不贅。

8. 鷽斯、ハシブトガラストアリテ、又コクマルガラストモアリ。此カコミアルハ如何ナル故ニ候哉。

コノ一説アレ汪今ハ不用ノ印也。

9. 鷽斯ノ圖ノ次ノ鶉、和名ワシトアリ。鶉之奔々ノ鶉ハウヅラニ〆、匪鳶匪鶉ノ鶉ハ音タンニ〆ワシノヿナリヤ。

然リ。

10. 鴛鴦ノ和名オシトアリ。オシトイヘバ鸂鶒ノヿニモ、鴛鴦ノヿニモナリ候哉。

鴛鴦ハ未詳。オシノ説モアレ汪不取。

11. 鷸、和名オナガキジトアリ。和産モ有之候哉。

無。

12. 鶩ノ下、愚按ノ文中略如二老人頭童及扶老之杖一〇故又名二扶老一〇トアリ。此文、綱目ニハ又如老人頭童及扶杖之状トアリ。綱目ノ方ハ老人ノ頭ノ~~如シ~~童及ビ杖ニ扶ケラルヽノ狀アリト可訓候哉。

童ハ禿テ髪ナキヲ云。童子ノ謂非。

13. 新校正ノ訓點ハ、又如二老人ノ頭童及レ扶-杖ノ状一トアリ。如此ヨミ候テハ文意難解ヤウニ御座候。頭〇童ノ間ニ句アルベキヿ歟。

非也。

鳥部終

14. 馬條下、愚按以下ノ文ニ馬ノ名狀分別ノ說正シク候哉。

名皆正シ。句讀有違多シ。

15. 尨、イヌトアリ。下ノ註、說文ヲ引テ、尨、犬之多毛者也トアリ。是レニテハ、スイケンノ如シ。然レ圧、詩ニ所謂ハタヽ犬ノカヘ字ニ用ヒタルマデニテ候故、細カクワクルニ不及、タヽイヌト見テ可然歟。

然リ。

16. 騶虞、和產ナク候故、和名モナク候哉。

然リ。

17. 貆、ムジナノコトアリ。貉ノ子ナリヤ。

然リ。

18. 下文引爾雅、貉子、貆トアリ。郭註、其雌者名貛トアリ。然レバ貉ハ卽貉ニテムジナ、貛ハムジナノメナリヤ。

然リ。貉、貉同字。

19. 又、本草綱目、貉ノ釋名ニハ、爾雅、貉子曰貊。音陌中略原本以貊作貆者訛矣トアリ。貆、貊二字イヅレヲ以テ正トスベキ哉。

綱目之說ハ不取。

20. 碩鼠、オホ子ズミトアリ。詩ニ云ハタヽ大ナル鼠ト云ヿニテ、常鼠ノ大ナルモノヲ云歟。

可也。

21. 本草綱目ノ鼫鼠トハ別ナリヤ。

然リ。

22. 兕ハ和產ナキユヘ、和名モ無之候哉。

然リ。下皆同。

23. 猱ハ和產ナキ故、和名モナク候哉。
24. 貔モ和產ナキ故、和名モ無之候哉。
獸部終

25. 阜螽ヲイタチトアリ。本草ノ蟲螽ニ候哉。
然リ。
26. 阜ハ蟲同音故ニ阜ノ字ヲ詩ニ用ルカ。又、阜、蟲、同字ナリヤ。
略書也。
27. 下ノ註ニ蚱蜢ト一ツニ混スルヤウナリ。蚱蜢ハ子ギムシニテ、蟲螽トハ別ナルベシ。
然リ。
28. 蟠蠐、キクヒムシト云。諸木ノ蠹蟲ヲスベテ蟠蠐ト云テ可ナリヤ。
然リ。
29. 蠦、コセミトアリ。蟪蛄ノ冂ナリヤ。
泛ク指一物ニ非。
30. 蒼蠅ノ下ノ注、名物解、今俗謂之麻蠅トアリ。又、愚按云云ノ說ニ、斷以麻蠅爲允トアリ。麻蠅、蒼蠅、別種ナルベキニ、此說アルハ當爲非哉。
愚按之說、非也。
31. 蜩　蟐同セミトアリ。蜩モ蟐モ汪ニ蟬ト云ト同シ冂ニテ、セミノ總稱ナリヤ。
然リ。
32. 又、蜩ト蟐ト分別アリヤ。
綱目ニハ別アレ汪、詩ニテハ別ベカラズ。
33. 莎雞ノ下　古今注、莎雞、一名紡緯。雅翼、一名絡緯。今人謂之絡絲娘中略一名馬蠶。
愚按、今吳人呼紡績娘トアリ。
右ノゴトク候ヘバ、
紡緯　絡緯　絡絲娘　馬蠶　紡績娘
イヅレモクツワムシノ冂ニ候哉。
然リ。尚屬多シ。
34. 蠋、イモムシトアリ。烏蠋トイハズシテモ、ヤハリイモムシト訓シテ宜候哉。
然リ。
35. 宵行ノ下、愚按ノ下ニ、卽宵行也。俗名螢蛆云〻。コヽニツチボタルト、クサボタルト混ズルハ非ナリヤ。
然リ。
36. 蜴、トカゲトアリ。單ニ蜴ト云モトカゲナリヤ。

然リ。

37. 螟蛉、クハノムシトアリ。桑葉上ニアル青蟲ヲ申候哉。

然リ。

38. 蜮ハ和産ナキ故、和名モ無之候哉。

同斷。

39. 螟、クキムシトアリ。是ハ草ノ莖ヲ食フ蟲ヲスベテ申候哉。又、螟ト名クル蟲一種アリヤ。

稻莖ヲ食蟲也。

40. 螣、ハムシトアリ。蝗ノ屬スベテ草葉ヲ食フ蟲ヲサシテ云カ。又、螣トサスムシ蝗ノ類ニ別ニ一種アリヤ。

總名ニ非。蝗ノ類也。

41. 蟊、子ムシ　ケラトアリ。是モ草根ヲ食フ蟲ヲスベテ蟊ト申候哉。又、ケラヲノミ蟊ト申候哉。

稻根ヲ食害スルモノ也。　ケラノ說ハ非也。

42. 賊、フシムシトアリ。草莖ノフシヲ食スル蟲ノ總名ナリヤ。又、賊トサス蟲一種。

稻ニ生スル蟲也。

43. 此螟、螣、蟊、賊ノ四種スベテ稻ノ冂ニカケテ申冂ニ候哉。然リ。又、外ノ草莖葉節根ヲ害スルヲモ如此トナヘ候哉。非也。

44. 蠆、ゼンカツトアリ。蠍ノ冂ニ候哉。

然リ。

蟲部終

45. 鱣　鮪　コノ二魚和産ナク候故、和名ナク候哉。

然リ。

46. 鰥モ和産不詳故ニ和名ナク候哉。

同。

47. 鰋ノ下、愚按云〻ノ文中、鰋ト鮎ト別ノヤウニトク。然レ圧、本草綱目、鯠ノ釋名ニハ一トス。本綱ノ說ニシタガフベキ歟。

可也。

48. 虺、クソヘビトアリ。本綱ノ蚖ナリヤ。

然リ。

49. 龜、イシガメトア（リ）。本草綱目ノ水龜ナリヤ。

然リ。

50. 鼉、和産ナキユヘ和名モ無之哉。

同。

魚部終

51. 卷耳　ミチクサ、オナモミトアリ。圃ノ中ニアルミチクサハ、イカナルモノニテ候哉。

ミヽナグサノ書誤也。オナモミノ名ハ非也。

52. 啓蒙、枲耳ノ下ニ卷耳ヲ子ズミノミヽトアリ。何ノ方カシカルベキ。

子ズミノミヽ、子コノミヽ、皆ミヽナグサノ了也。

53. 藟　即本綱ノ千歳藟ニ候哉。啓蒙ニモ此書ニモ和名ツケテナシ。和産シレザルユヘ和名モシレズ候哉。

然リ。

54. 藻　モ　フサモトアリ。モハ惣名、フサモハ聚藻ニテ候哉。何レトミテモ此詩ニ云處ハ相スミ可申哉。

然リ。

55. 菲ハ和産不詳ユヘニ和名モ無之候哉。

然リ。

56. 苓、アマクサトアリ。下ノ註ニ、藎、大苦トアリ。苓ト云字ノ了ミエズ。藎ノ字ト苓ノ字ト通用スルカ。

然リ。

57. 綠、コブナグサトアリ。淇奥ノ詩三章汪ニ綠竹トイヘリ。單ニ綠トバ（カ）リイヒテモ、ヤハリコブナグサナリヤ。

然リ。

58. 又、右ノ綠竹ハ、綠ハコブナグサ、竹ハニハヤナギト二物ニ分テミル毛傳ノ說ニヨルベキヤ。

此書ハ二條別ツ、故ニ草トス。

59. 綠ト竹ト毛傳ノ說ノ如クミルトキハ、本綱藎草ノ釋名ニ菉竹トツヾケテ、藎草ノ一名トスルハ非ナランカ。

一說也。

60. 又、朱傳ノ如ク綠ハ色トシテ、タヾタケノ了トミルガ宜候哉。先生御說如何。

詩ヲ說ハ朱傳ニ從ベシ。

61. 瓠、ナガヒサゴ、シヤクビヤウタントア（リ）。詩ニ云フ瓠ハ、イツレニシテモ通シ候哉。

瓠ハ長ヒサゴ也。此圖誤テ■瓠ヲ畫。是シヤクビヤウタンノ名ヲ入レ汪、紛レテ有之。

此名去ベシ。

62. 莫ハ和産シレザル故ニ和名モ不知乎。

然リ。

63. 蕢、スギナ、サジオモダカトアリ。何レニカ從フベキ。

スギナ也。サシヲモタカハ刊去ルベシ。

64. 右ノ下、愚按ノ註中略人多以毛傳有水蔦之名、故混爲澤瀉、其實非也トアリ。コヽニ水蔦ト云ハ、スギナノ了歟。

然リ。

65. 莪、ゼニアフイ、ハナアヲヒトアリ。何レニテモ莪ト云フテ可ナリヤ。本綱集解ノ說ニテハ、莪ハ錦葵ノ一名トミユ。御說如何。

可也。ハナアフヒノ說ナシ。

66. 芘芣、蚍衃、コノ二名、蜀葵ナリヤ、錦葵ナリヤ。

錦葵也。

67. 苕、ノヱンドウトアリ。本綱ノ翹搖ニ〆、大巢、小巢二菜ヲ通〆苕ト云ベキヤ。

然リ。

68. 萇楚、和産不詳故、和名モ無之哉。

然リ。

69. 葵ノ下ニ蔠葵、蘩露、承露ノ名アリ。三名汪ニ冬葵ノ一名ナリヤ。

落葵也。

70. 又、右、葵ノ下ノ愚按ノ註ハ落葵ノ了ナリ。葵ノ注ニ引用ユルハ非ナルベシ。

然リ。

71. 壺、クビアルフクベトアリ。匏ニカボチヤ形ノ如ク、上ニ一ダンアルモノヲ云ヤ。

然リ。

72. 匏ト壺ト、モトヨリ種モ別ナリヤ。

然リ。

73. 苹、カハラバヽコトアリ。又、前ニ出ル蕭モカハラバヽコトアリ。苹、蕭、同一物ナリヤ。

然リ。

74. 芩、ヂシバリトアリ。馬唐ノ了ニ候哉。又、馬唐ノ外ニ、ヂシバリト云同名ノ草アリヤ。

馬唐ニ非。馬唐ハメヒジワニ〆、チシバリトハ訓ゼズ。

75. 臺、スゲ、ハマスゲトアリ。スゲモハマスゲモ同シ了ナリヤ。

別也。スゲト訓ベシ。愚按及恭ノ說香附子（ハマスゲ）トス、非也。

76. 莪、和産ナキユヘ和名モナキ哉。

然リ。

77. 芑、ノゲシトアリ。苦菜ノ冂ナリヤ。前アル荼モ、ノゲシトアリ。芑、荼、同一物ナリヤ。

然リ。

78. 葍、ヤマゴボウトアリ。商陸ノ冂ナリヤ。

然リ。

79. 蔚、オトコヨモギトア（リ）。牡蒿ノ冂ナリヤ。

同。

80. 蔦、ヤドリキトアリ。寄生ト同シク諸木ノヤトリキノ惣名ナリヤ。

然リ。

81. 荼、タデトアリ。下ニ引用ユル古今注ニ、荼、蓼、紫色者荼也、青色者蓼也トアリ。ムラサキタデヲ以テ荼トスベキ哉。

然ルベシ。

草終

82. 棘、コナツメトアリ。棘ハ卽チ棗ノ生長セザルヲ云フテ、別ニコナツメト云木ハアルニ有ラザル歟。

然リ。

83. 檀ハ和産シレザルユヘ和名モナキ哉。

然リ。

84. 棘、コナツメトアリ。前ニアル邶凱風ノ棘モコナツメトアリ。同物ニ候ハヾ重複ニ出スナランカ。註ハ前ニ出ル棘ノ注ト別ナリ。前ノモ是モ、下ノ説ニカヽハラズコナツメトシテ可ナラン哉。

然リ。兩條ニ出ハ此書ノ誤也。

85. 樞、アキニレトアリ。本綱ノ榆楡ナリヤ。

然リ。

86. 栲、和産、和名汪ニ不詳候哉。

然リ。

87. 杜、モチノキトアリ。本綱ノ冬青ナリヤ。

然リ。

88. 條ハ和産、和名シレ不申候哉。

然リ。

89. 梅、ユヅリハトアリ。終南ノ詩ニ有條有梅ト云ヘル梅ハ、ムメノ冂ニアラズ、交讓木ノ冂ナリヤ。

然リ。

柟、卽楠ノ字。

90. 柟モユヅリハノ冂ニ候哉。ムメモ通雅ニハ梅、柟ノ名ミエタリ。卽啓蒙ニモ引テアリ。疑ラクハ、是ハ爾雅ノ梅ハ柟ト云誤讀ノ、ムメノ冂トスルナラン。然リ。

91. 又、柟モ、ムメトユヅリハト二物同名ナルカ。

然リ。

92. 駮、ムクノキトアリ。糙葉樹ノ冂ナリヤ。

然リ。

93. 枌、ニレトアリ。本綱ノ楡ナリヤ。

然リ。

94. 本綱ニハ、白者名枌トアリ。コノ白ト云ハ、木ノハダノ色白キヲ申候哉。シラカシ、アカガシノ例歟。

可然。

95. 常棣、ニワムメトアリ。前ニアル鬱ト同物ナリヤ。

然リ。

96. 楔ハ和產、和名詳ナラザル歟。

然リ。

97. 桋ハ和產、和名詳ナラザル歟。

然リ。

98. 柞、クヌギトアリ。前ノ栩ト同シ冂ナリヤ。

然リ。

99. 右、柞ノ下ノ注ニ引トコロノ陳藏器曰、柞木生南方、細葉、今以之作梳者是也トアルハ柞木ニテ、イヌツゲノ冂ナリ。詩ニ云フ柞ハ、クヌギト見ルヲ宜キトセン哉。

然リ。

100. 棫、オクヌギトアリ。卽チ櫟ノ雄ナル者ニテ、實ヲムスバザルモノ歟。

不結實ニ非ス。實小ニノ、櫟ノ如クニ大ニナラス。

101. 梏ハ和產、和名汪ニ不詳候哉。

然リ。

102. 椐ハ和產未詳故ニ、和名モシレザル哉。

同斷。

103. 槀ハ桑ノ類ニ〆、和產未詳モノニ候哉。

同斷。

木部終

104. 此圖說ノ中ニ鳩カツコウドリ、鳩カムリドリ、荼ノゲシ、荼ツバナ、荼タデ、梅ムメ、梅ユヅリハ、杞コブヤナギ、杞クコ、杞ヒラギ

右等同名異物ノ分別ノ說、此說ニヨリテ可ナリヤ。

然リ。

105. 若水翁ノ小識、~~松岡先生~~江村如圭ノ名物辯解、近來刊行ノ名物圖考ナド、誤多キヤウニ見エ申候。右等ノ書ヨリハ、此圖說正シク候哉。

皆有是非。

右謹乞

教示　　春木煥光拜

蘭山小野先生玉案下

※　本稿は平成二十七年度～平成三十年度科研費若手研究（B）「日本の『詩経』図解における特色の形成に関する研究」の成果の一部である。